



デイスイート



仲原圭人

「ねえキヨミ、あなたが初めてお酒を飲んだ日のこと、覚えてる？」

カコは片手に焼酎の水割りが入った湯飲みを持ちながら私にそう尋ねた。どこの町に行っても同じように存在するチェーン店の居酒屋。マニュアル通りに威勢の良い声を発し続ける店員と、上司や同僚に対する愚痴を間断なく発し続ける会社員達に紛れ、私達は向かい合って酒を飲んでいる。

「さあ、覚えていないわ。もう何年も前のことだもの」

私はお酒は好きだけれど、得意ではない。

私の眼前に置かれている冷やの日本酒は、店員が運んで来てから約一時間経った今でも半分以上残っている。対して強くもないのにガバガバあおり続けているカコは今日どれ程アルコールを摂取しているのか、私も、恐らく本人すらも覚えてはいない。

「私はね、覚えてるよ、初めてお酒を飲んだ日のことを。あれはね、大学に入って間もない日のことだった。ワンダーフォーゲル部に入って、三日目のことだった。新歓コンパの二次会で、先輩の家に行った時だった。えーと、何て名前だったっけ、あの先輩」

「岸田」

「そうそう、岸田先輩。よく知ってるね」

「何度も聞いてるからね」

「そうだった？ でね、一次会の飲み屋では飲まなかったんだけど、人数が減って先輩の家に行った時には断り切れなかったんだよね。酔い潰れても俺が面倒みてやるからって言われて。で、何かやたら甘いお酒出されたんだよね。もう殆どジュースと変わらないようなやつ。で、美味しい美味しいって調子に乗って飲んでたら、一缶を開ける内に酔い潰れちゃってね。で、気付いたら他の部員が一人もいなくて、私と先輩、二人きりになっていたの。それで、酔っ払って意識が朦朧としている私に先輩が何をしたか分かる？」

「強姦」

「そうそう、正解。よく知ってるね」

「何度も聞いてるからね」

「そうだった？ でね、その時の私は視界がぐるぐる回っていた。先輩は私の身体を舐め回していた。舌が胸や股を這いずり回っていた。私は、笑っていた。舌の感触がこそばゆくて、先輩の真剣な表情が滑稽で、定まらない焦点で、緩み切った口角から唾を垂らしながら大声をあげて笑っていた。そんな私に、先輩が何をしたか分かる？」

「暴行」

「そうそう、正解。よく知ってるね」

「何度も聞いているからね」

「そうだった？ でね、先輩は私の頬を打った訳、二度か三度か、よくは覚えていないけれど、とにかく殴った。先輩は真っ赤な顔をしてた。そしてその顔と同じくらい赤くて青筋を立てた陰茎を露わにして私に挿入したの。痛かった。痛かったよ、とても、とても。でもね、やっぱり、私は笑っていたの。顔面を殴られても、処女膜をブチ破られても、声を出して笑っていたの。裂かれた膜が痛くて痛くて、無理矢理犯されているのが悲しくて悲しくて、だけど、私は笑うことしか出来なかったの。涙なんか流してない。ただ純粹に笑っていたの。何故かは分からないけれどね。そんな私を先輩は全く無視して腰を振り続けて、やがて私の膣内に精液をどろりと流し込んで果ててしまった。その後のことはよく覚えていないの。私の記憶はそこで途切れてしまったから」

言い終えると、カコは両手に掴んでいた湯飲みを口元に運んで中に入った焼酎をグイッと飲み干した。ふう、っと熱い息を短く吐く。私も、日本酒の入ったお猪口を唇に当てた。けれど、殆ど酒は私の口内に運ばれてはいない。スポイトで一滴分にも満たない程も飲んではいない。私はただ、無言である必然性を得る為だけに僅かながらの酒を飲んだのだ。カコの、先輩に犯された話を聞くのは何回目だろう。何度聞いても、何十回聞いても、リアクションに困る話だ。

「ねえキヨミ、あなたが初めてお酒を飲んだ日のこと、覚えてる？」

カコは再び同じセリフを繰り返した。さっきよりも確実に呂律の回っていない口調で、充血した瞳に涙を湛えて、同じ言葉を吐いた。

「さっきも言ったけれど、覚えていないのよ。恐らくアナタと同じで大学に入ってからだとは思いますが」

私とカコは同じ年齢で同じ大学で同じ学年で同じサークルで出会った。カコが岸田先輩に処女を奪われた新歓コンパにも私は参加していた。もっとも、場の空気に馴染めなくて酒も飲まずに一次会のみで帰宅してしまったけれど。で、その翌日に目を真っ赤にして甘ったるいカクテルを飲みながら今みたいなチェーン店の居酒屋で処女喪失の話を涙ながらに聞いたのが一回目だった。その時は私も少なからずアルコールを摂取していたので、当時の感情を正確に思い出すのは難しいけれど、私は、月並みに憤っていたと思う。勿論、不貞を働いた先輩に対して。そして、然るべき機関に告発しようとか何とか、青臭くも至極真っ当なアドバイスを真剣に言っていたと思う。それに対してカコは「うん」とか「まあ」とか何とも煮え切らない返答を繰り返していた。その時の私は、強姦されたショックでカコの思考が真っ当に働いていないからそんな曖昧な返事を繰り返しているのだと思っていた。自分勝手に正義感をたぎらせて、自分本位な感情移入

を繰り広げて、カコに分まで怒りを漲らせていた。

だけれど。

だけれど、その後カコが岸田先輩を告発することは一度たりともなかった。

それどころか。

それどころか、カコはその後も岸田先輩と性交渉を繰り返し続けた。

その回数はカコの自己申告によると時に十三回だったりするし四回だったりするし百三十一回だったりする。その申告回数はカコの酔いが深ければ深い程回数が多いような気がするけれど、そこに確かな法則性はない。

ただ確かなのは、カコは処女を酩酊の末に無理矢理喪失させられた相手とその後性交渉を繰り返し続けた、ということだ。

その時にカコが酔っ払っていたのか否か、避妊を行っていたのか否か、そんなことは知らないし知りたくもない。ただ事実として在るのは、目の前にいるカコは出産の経験も墮胎の経験もない、ということだけだ。

私は改めて目の前に座るカコの顔を見る。彼女の容姿の美醜を判断するのは同性の私としてはとても難しいけれど、それでも敢えて評するならば

『ああ、この娘は男からは好かれるけれど、女からは嫌われるだろうな』

という感じだろうか。媚びるような、頼り切るような、そんな淡い弱さを無自覚の内に表情や仕草に出してしまう、実に好き嫌いの別れる容姿をしている。特筆することのない容姿の私に取ってみれば、どんなものであれ特徴があるのは羨ましいように思うのだけれど、カコ本人はメリットもデメリットも同じだけ享受しているようだった。まあ、要するに、男友達及び彼氏には困らないけれど、女友達は限りなく少ない、ってことだ。事実として、私はカコが私以外の女と親しげに会話しているのを見たことがない。カコってのは、そういう女なのだ。

「ねえキヨミ、仕事の調子はどう？ 上手くやってる？」

カコはぼうっと天井を眺めながら小さな声でそう呟いた。つられて私も天井を見る。周りの席に座る壮年の男達の吐き出す煙草の煙によって空気は淀み、白く濁り切っていた。天井の様さえ見えない程に滞留する煙を吹き飛ばそうと私は息を吐き出すけれど、それは口笛を吹くことが苦手な幼児の吐息のように空しく眼前の空気を混ぜ合わせることに出来なかった。

私は、仄かに酔っ払っている脳内でカコの問いを反芻させる。

仕事、仕事、仕事。

「どうだろうね。ひとまず言えるのは、きちんと労働して、きちんと賃金を得ることに

は成功しているわね。それがカコの言う『上手くやってる』に該当するのかどうかは分からないけれどね」

「そっか、それはどう考えたって、上手くやってるよ。流石キヨミだね」

「流石って言われる程のもんでもないでしょ。カコだってきちんと働いているわけだしね」

「まあ、ね」

目を伏せて小さな声でそう言うとカコはまた焼酎をグビリと飲んだ。

「何故人は、働かなくちゃならないのだろうね」

カコが焼酎の入った湯飲みを揺らしながら言う。

「そりゃあ、お金を稼ぐ為だろう」

私は手元に置いてある日本酒の入った猪口をチラリと見て言う。

「何故人は、お金を稼がなくちゃならないのだろうね」

「そりゃあ、生きていく為だろう」

「何故人は、生きていかになくちゃならないのだろうね」

「そりゃあ……何故だろうななあ」

私達の間には刹那、沈黙が横たわる。それに必然性を貸与させるようにカコは残っていた焼酎をクッと飲み干した。私もつられるように猪口の中の日本酒を全て流し込んだ。日本酒が通った喉の中の道筋がカッと燃えたように熱い。改めて、私は酒を飲んでいるのだなと実感する。

「キヨミ、あなたの現状はどう？」

「……質問が漠然とし過ぎていて答えようがないな」

「そう？ それならば、あなたの人生はどう？ という質問に代えようかしら？ 思うようにいっている？ 十代、二十代前半に思い描いた通りになっている？ キヨミ、いや、あなたに聞いているのよ。分かるかしら？ 伝わるかしら？ あなたの人生は如何？ 夢だとか、希望だとか、愛だとか恋だとか、そんな、アメリカツのドーナツよりも砂糖にまみれた甘言に惑わされ、甘い日々を過ぎ去った拳句、あなたに残された、剥き出しの現状はどう？ 理想と現実の真ん真ん中に立って、それぞれに押し潰されそうになりながらも呼吸を続けている気分は如何なもの？」

私は、長い息をゆっくりと吐き出す。

「……カコ、悪いけれど、私にはあなたが何を言いたいのか、何を聞きたいのか、理解出来ないのだけれど」

「ふうん、それがキヨミの回答？ まあ、別に私はそれにケチを付ける気なんざさらさらないけれどね」

見下すような、見透かすような口調でカコはそう言った。

「それなら――」と私は若干の苛立ちを語気に乗せてカコへ向けて言う。

「それなら、あなたの人生はどうだって言うの？ 十代の終末にほんのりと憧れていた先輩に犯された拳句にだらだらと肉体関係を持ち続けた末に残された、オマケのような、後書きのような、絞りカスのような、現在はどうだっていうの？」

私の息が上がっている。呼吸の数が増えている。心拍数が上がっている。それでもカコはどうってことない顔で、全く平常心のままで、私を見ている。

それが何だか苛立たしくて、まるで私の全てを見透かしているようで、見抜かれているようで、私は私の体温が瞬間的に沸騰するのを感じた。まるで何もかもを理解しているような、そんな泰然自若としたカコの落ち着き払った態度に腹が立って、反射的にカコを怒鳴りつけてしまいそうな衝動に全身を乗っ取られそうになってしまう。

上から見下されるのが好きな人なんていないだろうし、下から見上げられるのに優越感を感じない人なんていない。私はそんな一般論の中にばっちり当てはまっているから、カコのことをぶん殴りたくなってしまおうけれど、それでも、私は一応生物学的には雌に分類されるので、大衆の面前で暴力を振るうのは躊躇われてしまうから、握った拳はテーブルの下でグーパーグーパーと開いて結んで現実で暴力を振るうのはどうにか堪えることにする。いっても大人だからね、私は、一応。

「私には未来のことは分からないよ」

「過去のことだって怪しいでしょうに」

そう言ってからカコは唇の端だけを引きつるよう持ち上げてからニヤリと笑った。その笑いの成分には、多分に侮蔑の色が込められていた。少なくとも、私にはそう思われた。

それから、どれだけの時間が過ぎたのだろう。

アルコールを過剰摂取した際特有のたわんだ体感時間では現実的に時計の針がどれだけ進んだかを予測するのは酔い潰れる一歩手前まできている私には限りなく困難だ。だから、私と、カコが最後に言葉を交わしてからどれだけ秒針が周回を繰り返したのかを把握することは私にとって度し難い。もしかしたら直近の鉤括弧から何らかの会話を交わしている可能性もあるのだけれど、少なくとも、私にはその記憶はない。なんせ、酔っ払っているのだからね。

酒は飲んでも飲まれるな。

そんな手垢の付きまくった標語がアルコールにどっぷりと浸かった脳ミソの周りをふわりふわりと漂っていて、私は目を回しそうになってしまう。

やっぱり、私は、酔っ払っているのだ。どうしようもない程にね。

「—ねえ、聞いている？ キヨミ、ねえ、聞いているの？」

フェードインするようにカコの声が耳に届く。

「え？ ああ、ごめん、全くもって聞いてなかった」

「だろうと思ったよ」

正直に答えた私にカコは肩を竦めて返事をする。

「ごめんごめん。で、なんだって？」

全く困った奴だな、ってな感じでカコは肩を竦めた。

「もうね、時間なんだよ」

「時間？ 時間ってなんの？」

私は自分の呂律が全くもって回っていないことを自覚している。自覚はしているのだけれど、それを正すことは残念ながら出来そうになかった。思考と挙動の歩幅が絶望的にずれている。英語で表すならばsilly walkerてなことになるのだろうけれど、要は、ただの、凡百な酔っ払いであるということだ。糞ったれな酔っ払いっゅー訳だ。イエー。

私は数秒前に自分が発したセリフと全く同じ言葉を吐き出した。

「時間？ 時間ってなんの？」

「なんのって、そりゃあもう、お別れの、だよ」

そのセリフに対して、私の心はそれほど動くことはなかった。それが重大な発言だなんて微塵も思っていなかった。せいぜい時候の挨拶程度にしか受け止めていなかった。

「なんだよ、もう帰るのかよ」

「そうだよ、もう帰るんだよ」

カコはどこか、面倒臭そうにさえ見える程に、ともすれば鼻の穴に小指を突っ込んでほじくり返しそうな程に、事もなげに、なんでもなような素振りでそう言った。

「もう門限の時間にでもなるのか？」

私はケータイを取り出して現在の時刻を確認するけれど、酩酊の果ての果てにアルコール濃度の限りなく高まったゲロの臭いを胃袋から吐き出し続けている私にはそのデジタル表示が何時何分何秒を指し示しているのか、全くもって理解が出来そうにもなかった。

「別に私自身に門限なんて設定されていないけれどね。キヨミと同じようにさ」

カコは気だるそうに頬杖をついて、アルコール濃度の高そうな生温い吐息と共にそんな台詞を吐いた。そして続ける。

「だけどね、タイムオーバーなんだよ。それは幸か不幸かは分からないけれども、とに

かく、厳然と定められた事実なんだよ」

「何だよ、それ。分かんねえよ、そんな訳」

「ははっ」

ってカコは笑った。酒で湿り切っている筈なのに、これ以上ない程に乾ききった音色で吐き捨てるように笑った。そして続ける。

「大丈夫大丈夫、別に今生の別れって訳でもないしさ。それに、嫌でもまた何時か、私と向き合わなきゃならない時が来るんだから、そんなに気にしなくても平気だよ。それにさ——」

そこでカコは唇の右端を釣り上げ、何らかの悪意を含めた嘲笑を浮かべた。

「それにさ、ほら、あんたが待ち望んでいた人がやって来たよ」

カコはスッと私の後ろの方を人差し指で指し示した。私はその動作につられて後ろを振り返る。

岸田先輩がいた。

入口の引き戸を開けて、黒縁の眼鏡を押し上げて、誰かを捜すように辺りをキョロキョロと見回していた。

いや、違う。

誰か、ではない。

私だ。

岸田先輩が捜しているのは、他でもない、私だ。そのことは、私自身が、一番よく知っている。

散々店内を見回した揚句に私を発見した岸田先輩は、酷く下卑た笑みを口元に湛えた。もしかしたらその笑みは、岸田先輩にとってとびきりの、万人に受け入れられるスマイルなのかもしれないけれど、少なくとも私にとっては、ただの、下品な、下劣な、劣悪な笑みでしかなかった。そんな笑みを湛えたまま、保ったまま、岸田先輩は私の方へと歩みを進めてくる。煙草の煙でくぐもった空気の中を、まるで能面でも張り付けているみたいに、気味が悪い程に、変わらぬ笑顔のままで私に近付いてくる。私は僅かばかり残っていた日本酒を、グイッと飲み干した。喉が、焼ける様に熱かった。私は岸田先輩の笑顔に応える様に、どこからどう見ても微笑みにしか見えない、とびきりの苦笑いで返してみせた。

「よう、遅れてごめんな」

相変わらずわざとらしいにやけ面を顔面に張り付けたまま、演技がかった動作で携帯電話を取り出し現在時刻を確認しながらそう言った。

私は確かにしこたま酔っ払ってはいるけれど、これくらいは分かる。約束の時間は、とうに二時間以上は過ぎている。だけれど――。

「ううん、大丈夫だよ」

そう答えるしか私には選択肢が残されてはいない。

「そっか、なら良かった」

予定調和な問答の果てに岸田先輩はそう言った。そして、私の座っているテーブル席をしげしげと見詰めてから言う。

「もしかして、誰かと呑んでた？」

卓上には、どう見たって二人分にしか見えない空の徳利や湯飲みが雑然と転がっている。私は答える。

「そんな訳、ないでしょう？ それは、あなたが一番分かっているでしょう？ 私には友達や、心を許せるような、悩みを言ったり聞いたりするような間柄の人物は唯の一人として存在しないってことを、あなたは知っているでしょう？ 大学時代から、たった今まで、私が本当に、心底、心を開ききっているのは、あなたしかいないのよ？ だからこれは全て、私がたった独りで飲み干したものよ」

私の言葉をきちんと最後まで聞いた岸田先輩は満足したように「そっか、そうだよな」と深く頷いた。

私は岸田先輩が、この類の台詞に弱いことを知っている。そして岸田先輩もまた、私がある事を知っている事を知っている。その結果として生み出されたのが先の会話なのだから、茶番、という言葉を用いることですら憚れる、糞みたいな予定調和な会話なのだ。私は、空になっているお猪口やさっきまで焼酎が入っていた湯飲みから目を逸らす。

そして岸田先輩は私の正面の席に座った。さっきまでカコがいた席に座った。店員を呼んで生中を注文する。

そして、何だかよく分からないけれど、調子の良い事をペラペラと喋り出した。酔いが回りに回った私にはその一言一句理解することが出来ないけれど、その言葉の全てが、私の処女膜をブチ破った陰茎を再び私の膣内に挿入する為の前戯だっていうことぐらいは私は分かる。何故ならば、私が処女を消失してからのここ数年間は、私と岸田先輩は、それのみによって、文字通り繋がっているのだから。

私は気付かれないように溜め息を吐き出す。胃から上がってきているゲロを飲み込む。

そして私は諦念する。わたしは渋々受け入れる。

糞つたれな程、吐き捨てる価値すらない程、甘ったるい日常が、深夜に差し掛かっ

たたった今、始まることを。

私と、カコと、岸田先輩と、泥酔と、共に。

<了>

デイスイート

<http://p.booklog.jp/book/72548>

著者：仲原圭人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kiyotonakahara/profile>

感想はこちらのコメントへ <http://p.booklog.jp/book/72548>

ブックログ本棚へ入れる <http://booklog.jp/item/3/72548>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ